

日緬両国で生かす現地理解教育

— 微笑みの国ミャンマーヤンゴン日本人学校での実践およびその後の活動 —

前ヤンゴン日本人学校 教諭

愛知県知多郡武豊町立武豊中学校 教諭 岩橋 雅高

キーワード：現地理解，現地校交流，国際理解，帰国後の活動

1. はじめに

ミャンマーは、インド・バングラディシュ・中国・ラオス・タイと国境を接する東南アジアにある国で、主要産物としてチーク材、米、宝石などが有名である。

日本で伝えられるニュースは、軍事政権によるアウンサンスーチーさんの軟禁、武力によるデモ制圧や鳥インフルエンザ、サイクロン被害などものしいニュースばかりだが、国民の多くは仏教を厚く信仰し、心穏やかに暮らしている。しかし、物質的には豊かとは言えず、国民一人当たりのGNPは、180ドルほどに過ぎない。貧富の差も激しく、米の自給率が130%近くある国にもかかわらず、米を買うお金がなく米のとぎ汁を買って飲んでいる人も存在する。

基本的に学費は無料だが、文房具や制服を買うお金がなかったり、幼いときから働かされていたりして、学校に通えない子どもたちも少なくない。しかし、一方では、公立の学校以外にもコンピュータの専門学校や英語・日本語・中国語・韓国語などの語学学校で学ぶ若者も多く、日本語も人気がある。

そのなか、多くの在留邦人子女は、現地校への外国人入学が認められていないため、ヤンゴン日本人学校に通っている。しかし、幼稚部・小学部・中学部はあるが、高等教育を受けられる場はないので、日本へ帰国するか、インターナショナルスクールに通うことになる。またインターナショナルスクールに幼いころから通っている生徒もおり、国語の指導を受けられる場がないため漢字や作文が苦手な子が多く、依頼があればボランティアで指導していた。



ミャンマーのマンキン公共学校の生徒達

このような環境の中、日本人学校の児童生徒は、自由に街に出歩くことはほとんどなく、ミャンマーに住んでいるのにもかかわらず、そこに住む人々やその文化に触れる機会が少ない。数少ない邦人が肩を寄せ合って助け合いながら暮らしている雰囲気があるので、日本人学校の子供達も日本人の中だけで活動することが多く、実際にミャンマー人の同年代の子と接する機会は、ほとんどない。日本のメディアも規制があり、入手しにくいいため、日本の様子についても知る事が難しい。ミャンマーに長く暮らしている子もダブルの子もいるが、将来、ミャンマーから離れて生活する児童生徒がほとんどなので、学校活動の中で異文化理解できるように交流活動に力を入れた。

2. 活動の実際

(1) 現地理解教育

ミャンマー政府は、現地校と外国人との交流を制限しているため、政府の管轄ではない私立の聾学校と僧侶が経

営するマンキン公共学校との交流を進めた。また、同じ外国人の学校としてフランス人学校との交流も行なった。どの学校とも、自国の文化を紹介しあう形式で行なった。

3校とも、コミュニケーションをとる言語に苦労したが、英語を中心に進めていった。ミャンマーの子供達も英語を学習しているので、簡単な英語で通じることができた。難しいことは日本人学校のミャンマー語が話せる生徒や教師が通訳として、間に入った。生徒達は、交流しながら、次第に「好きな食べ物は?」「家族は何人?」「好きな映画は?」など個人的なことも話し始めた。

ミャンマー文化を深く知るためには、総合的な学習の時間を中心に、「ミャンマーの食文化」「ミャンマーの中の日本」「ミャンマー人から見た日本人」などのテーマに沿って現地理解学習を進めた。

子供達は、市場での聞き取り調査やお坊さんの学校である僧院でのインタビューなどを意欲的に行っていた。

普段、スクールバスで通い、日本人の集団の中で暮らしている生徒が多く、市場などで現地の人と話すことにより、ミャンマーの生活を垣間見ることができた。また、外国人の突然の質問にもかかわらず、笑顔で一生懸命答えてくれる現地の人々の優しさに感動したという感想も聞かれた。

(2) チルドレンズフェスティバル

日本文化を紹介し、かつ他国の文化を知り、いろいろな国のことコミュニケーションをとることを目標に年に一度、ヤンゴンにあるミャンマー人の学校や外国人の学校を招いて、各学校の絵画展示や舞台発表などを行っていた。また、ホスト校として、生徒中心に準備・計画・運営をすすめていく行事で、家政婦さんなどを雇い身の回りの面倒を見てもらうことが普通になっている生徒達にとって、失敗しながらも自ら動くことができる貴重な経験となっている。さらに、多くの国の子供達に会い、友達を増やすチャンスとしても、意義のある行事になっている。

3. 体験を生かしたその後の活動

日本へ帰国した後、すぐにミャンマーで大規模なサイクロン災害が発生した。ナルギスと名づけられたこのサイクロンによって、エーヤワーディ川のデルタ地帯で死者・行方不明者14万人以上というミャンマー史上最悪の被害がもたらされた。最大都市ヤンゴンでも、看板ははがされ大きな木は軒並み倒れ、電線が切られ、断水・停電が2週間以上も続くという状態になった。日本人学校も施設が屋根や窓が壊れ、伝記も来ない状態になったので、ほかの施設の一角を借りて授業をすることになった。私は、デルタ地帯にも、交流していた学校にも、知り合いが居るが、電話もつながらないので心配する日々が続いた。その被害が分かってくるたびに、クラスの子や授業を担当している子達に伝えていたのだが、その話を聞いて、ある日募金をしようという声が出た。

その後、生徒会が中心になって募金をし、その動きが町内の小中学校にも広がっていった。その後、町で集まったお金の一部を日本人学校の生徒会を通して、被災した人々に送った。ヤンゴン日本人学校生徒会では、交流していた学校で被害が大きかった学校に寄付をし、はやく授業再開ができるように校舎の修繕に役立ててもらいたいという意見があり、被害のあった交流校に届けられた。

その後、ヤンゴン日本人学校から現任校へお礼の手紙が届いた。その内容は、以下のようである。

武豊町小・中学生のみなさんへ

毎日暑い日が続いているとニュースで聞いています。みなさんお元気にお過ごしですか。僕たちヤンゴン日本人学校も、いよいよ明日第1学期の終業式をむかえることになりました。あのサイクロン「ナルギス」が来て、学校だけでなくヤンゴンや他の場所の大きな被害を知ったとき、1学期の終業式をこの日本人学校でできるとは思いもしていませんでした。みなさんをはじめ、いろいろな人たちの支援があって、明日という日をむかえることができるの

だと心から感謝しています。

さて、先月みなさんから送っていただいた義援金をヤンゴンにある2つの学校に届けてきました。報告が遅れてしまい、ご心配おかけしました。これからその状況について詳しくお知らせします。

6月26日8時30分、私たちは、学校の前にあるマリーチャップマン校と文化交流会をしてきました。私たちが交流したのは、約25人位の児童・生徒たちです。私たちは、はじめに復興の祈りをこめた「千羽鶴」と、みなさんからの義援金300ドル分の現地幣を渡しました。そのあと、マリーチャップマン校の生徒3人ずつ座るテーブルに1人ずつつき、折り紙で「つる」の作り方を教えました。マリーチャップマン校の人たちは、耳が聞こえないし、話すことも出来ないのです、教えるのが大変でした。だけど、みんな一生懸命折ってくれてとても嬉しかったです。

翌日7月27日9時、2つめの交流先であるマンキン校へ訪問しました。はじめに普通授業を見ましたが、どの教室もぎゅうぎゅう詰めでした。とても勉強などできないような環境だと正直言って思いました。でも、みんな必死になってノートをとったり、本を読んだりしていたので、びっくりしました。交流会では1つの教室に、約100人位の生徒が来て、日本の机の約3つ分ぐらいの横長い机に5人ずつ座りました。そしてマリー校と同じ「千羽鶴」と募金100ドル相当分の現地通貨、さらに日本人学校のある保護者あてに日本から送っていただいた別な義援金を元に購入したノートなどの筆記用具セットを1000人分を渡しました。そのあと、「つる」の折り方や、「あやとり」の遊び方を教えました。折り紙もそうでしたが、あやとりもとても興味をもって取り組んでくれたので、みんな一生懸命教えました。

武豊町のみなさんからの義援金がなければ、僕たちはこういう交流活動はできなかったと思います。今回この交流で感じたことが2つあります。1つ目は、人数の多さです。僕たちが見学した教室にはマンキン学校の生徒が100人ぐらいいました。僕たちの教室では最多で9人なので、その数に圧倒されました。しかもその教室は僕たちのものとあまり大きさが変わらなかったのです、とても驚かされました。それにも関わらず、マンキン校生徒たちはとても真剣に勉強していました。僕はなんだか少し恥ずかしいような気持ちになりました。2つ目は日本の文化にとっても興味を持ってくれたことです。マンキン校の生徒たちは僕たちがあやとりや折り紙を教えたとき、とても真剣にきいてくれました。そして次から次へと質問攻めにあいました。ミャンマーの子どもたちは、学校で遊ぶ時間などあまりなく、しかも家ではお手伝いなどしなければならぬためだと、僕なりに思いました。また、日本の文化の素晴らしさも同時に感じる事ができました。



交流校への寄付

今回の交流活動は、ナルギス（サイクロン）の被害者を支援するという武豊町のみなさんからの義援金を贈呈ことがきっかけとなり、充実したものにする事ができました。またそれを通して、僕たちはとても良い経験をすることができました。武豊町のみなさん、本当にありがとうございます。そして岩橋先生、先生がいなければこういう交流活動はできなかったと思います。本当にありがとうございます。

募金した生徒達も、この手紙を受け取るにより、ただのニュースでしかなかったミャンマーサイクロン被害に対して関心を持ち、困っている人を救うという具体的な活動に対する満足感を得たようだ。また、これをきっかけに世界のニュースに関心を持ち、日記などに意見を書いてくる生徒もいた。自分達にも、できることがあるんだという感覚をもつことができたようだ。

4. 終わりに

日本の学校を通じての交流活動・救済活動は、ヤンゴン日本人学校の生徒達にとって、交流校により深い関わりができ、現地の人を通じた現地理解学習が深まったように思う。また、日本の学校、日本人学校、ミャンマーの交流校、3校全ての生徒達にとって、国も民族も宗教も関係ない子どもたちならではの「おもいやる」関係ができたことが大きな成果として上げられる。

今後、救済活動というイメージから離れ、3校それぞれのなかで絵や手紙の交換などを通じて、より実感がもてる国際理解活動に発展させていきたい。わたしも、こどもたちも、地球に住む一人として互いに思いやる心を強くできるように、これからの活動をしていきたいと思う。